

There's a lot of things that are required to motivate any worker, and I think all of them have to be present to a certain degree.

従業員のやる気を引き出すのに必要なものには、いろいろなものがあります。しかも、それら全てがある程度揃っていないとだめだと思います。

things that are required to motivate any worker 従業員のやる気を引き出すのに必要なもの

**パターン表現** 「名詞 (things) + 修飾節」の文のつくりです。日本語だと「『従業員のやる気を引き出すためにひとつような』もの」のように修飾部分が名詞の前にくるところですが、英語はまず things のように漠然とした名詞で大きく置いておき、「どんな things なのか」という詳しい情報(修飾部分)は関係代名詞 (that など) で後ろからつけ足すという言い方がとても自然です。

その一方で、私たちにとっては、日本語の語順と逆になるため、聞き取りで混乱しやすいつくりでもあります。things ...と漠然とした名詞だけがきたら、ほぼ間違いなく後ろから詳しく説明してくれる情報が足されてきます。聞き取りの時には、それを覚悟して、「うん、どんなもの？」と待って、「名詞 + 詳しい情報！」でひとまとまりの感覚で聞き取るようにします。

**パターン表現** [名詞 + that is required to...] 「...するのに求められる(名詞)」、[名詞 + that is required for ...] 「...のために必要な(名詞)」は大変よく出てきます。

to motivate やる気にさせる、動機づける

**やまと言葉** to motivate のコアは「行動するための動機を与える」ということで、例えば、行動のための理由や刺激を与えることで「やる気を持たせる、動機づける」ことを言います。

any worker どんな従業員でも

**やまと言葉** [any + 単数形] で、「どんな～でも」という意味になります。従業員が motivate される条件というのは人様々ですが、ひとりひとりの worker を考えたとき、「どんな人にでも当てはまる条件」というものがあります。単数形を使うことで、この「誰にとっても必要となる最低限の条件」というニュアンスがより強調されます。

to be present ある

**やまと言葉** present は、「ある、存在する」というのがコアの意味です。ここは、have to be present で「なきやいけない」「必要だ」のような意味になります。

to a certain degree ある程度、ある程度まで

**慣用表現** degree は、「程度、度合い」という意味です。certain は「ある程度の」の意。

But I think probably the biggest one and the one I'd like to start with is; an opportunity to have input into the things that affect them:

が、その中でも特に一番大きなもので、まず私が最初に挙げたいのが、部下が自分たちに影響のあることに関して発言できる機会です。

But ... (確かに～)、でも...

**ロジック** 「従業員のやる気を引き出すのに何が必要か」という問いに対して、but 以降がスピーカーの答えになります。but の前 (There's a lot of things...to a certain degree) の、最初の部分が答えとも取れますが、but がきた時点で、「あ、ここからが話の本筋だ！」としっかりと押さえましょう。but の前の部分は、「話の前提」を言ってくれたと理解してもよいですし、あるいは、「確かに、ひとつだけじゃないですよ、でも...」と逆接できてきていると理解してもいいですね。

the one I would like to start with is ... まずひとつめは...

**慣用表現** 「(何かを) 挙げてください」という質問に対して、「まずひとつめは・・・」と始めるときの決まった表現です。one はここでは、a lot of things that are required to motivate any worker のひとつを指しています。

an opportunity (何かができる) 機会

**やまと言葉** 辞書には「機会」などの訳語で説明されています。同じような訳語で表される単語で chance がありますが、少しニュアンスが違います。chance は、「偶然性」にフォーカスがある単語で、「(偶然起こった)機会」という響きになります。それに対して opportunity は、「プラスのものが生まれる種」としての「機会」という点にフォーカスがあります。プラスの響きを感じられる単語であるため、好まれて非常によく使われます。プラスが生まれるということですから、an opportunity で「(何かが)できる！」と理解して聞き進むとメッセージが入ってきやすいです。

to have input into the things that affect them 自分に関わることについて意見を言えること

**やまと言葉** input は辞書になかなか出ていないのですが、人が何かのために出す「意見や情報」で、非常によく使われます。ここでは、「意見を言うこと、その機会」「発言権」といったニュアンスで使われているようです。

**パターン表現** the things that affect them で「名詞 (the things) + 修飾節」の文のつくりです。前出の things that are required... の説明にもある通り、「名詞 + 修飾節で後ろから詳しい情報！」は、英語でよく出てくる文のつくりである一方、私たちが聞き取りで混乱しやすいつくりでもあります。the things... と漠然とした名詞で置かれたら、ほとんどの場合、後ろから詳しく説明してくれるはずですから、「うん、どんなもの？」と後ろを楽しみに待つと同時に、「the things + 詳しい情報！」で「～なもの！」とひとまとまりにとらえられるように、このつくりをしっかり慣れておきましょう。

an opportunity to have input into how their job is done, an opportunity to have someone listen to them when they have a better idea.

つまり、自分たちの仕事のやり方について意見が言える機会、よりよい考えがある時に誰かに聞いてもらえる機会があるということです。

an opportunity to ... つまり、...な機会

**ロジック** 前出の「自分に関わることについて意見が言える機会」を、詳しく、より具体的に説明することでサポートしてくれています。話の流れを追って聞く際に大きなヒントになるのは、一文が終わった後に、その文の頭、もしくは文の途中から、同じかたちで次の文が始まった場合、前に言ったことを詳しく説明してくれる内容が続く場合がほとんどだという点です。

ここでは、(a) **an opportunity to** have input into the things that affect them: (b) **an opportunity to...** のようになっていますが、(b) の an opportunity ... が聞こえてきた時点で、「あ、具体的にどんな機会なのか、前の内容を詳しく言ってくれるかも...」と、先を予測して聞けるようになります。

how their job is done 仕事の仕方

**パターン表現** [ how S + V ] で「～のやり方」という名詞のかたまり(節)です。[ how S + V ] や [ what S + V ] の名詞のかたまりは、非常によく出てきます。文のなかに節が入ってくると、それだけでも聞き取りはむずかしくなるのですが、このような疑問詞で始まる節の場合、how や what という疑問詞が文の途中で突然出てくることになるので、私たちにとっては特に混乱しやすい文の構造になります。[ how S + V ] で「～の仕方、やり方！」、[ what S + V ] で「～すること！」と名詞一単語の感覚でとらえられるように慣れておくと、聞き取りで大きなプラスになります。

how you do that どうやってそれをするか = やり方

how we can do it better どうやってそれをよりうまくできるか = 改善方法

how we do our business 私たちがどうビジネスをするか = 私たちのビジネスのやり方

to have someone listen to ... 誰かに...を聞いてもらう

**文法** have は大変便利な動詞で、「人/ものを持つ(have)」とまず言っておいて、後で「どういう状態でその人/ものを持つのか」を、動詞の原型、-ing 形、who などの関係代名詞節など、いろいろなかたちで後ろから足して言うことができます。ここは、「someone を listen to...の状態でもつ」ということですから「誰かに聞いてもらう」のような理解になります。

If they are given an opportunity to participate, it encourages people to participate.

参画する機会が与えられれば、彼らも参画しようと気になります。

to participate 参加する

to encourage 促す、...する気にさせる

**やまと言葉** encourage のコア は、「勇気を入れる、与える」という意味で、そこから、「促す」、「励ます」、「自信を与える」のような意味になります。  
[to encourage 人 to~] のかたちで、「(人) が~するのを気持ちの上で‘やっごらんよ’と後押しする」感じになり、「(人)が~するのを後押ししてくれる」、「(人) が~しようとするのを促す」といった意味になります。

people 従業員、社員

**やまと言葉** people 「人々」という漠然とした名詞が使われた場合、それが「どういう人々を指すのか」はコンテキストによります。ここは「組織、職場」の話をしているので、「社員、従業員」の意味になります。

If ..., it encourages ~ ...すれば、~ しようという気持ちになる

**文法** it encourages...の it は if 以下 (if they are given an opportunity to participate) を指していません。

**ロジック** ここは、「自分に関わることについて意見を言えること」の利点を売るサポート部分です。利点を売る際によく使われる表現が、[ if ..., (プラスの内容) ] 「もし...すれば、こういうプラスがあるよ」です。[ If..., we can ~ / we become ~ / it allows ~ / it encourages ~ など ] の表現と、この言い方によって利点を売り込んでくれているのだという点に、しっかりと慣れましょう。If they are given an opportunity to participate...「参画する機会が与えられれば...」と聞こえてきたら、「あ、利点を言ってくれそうぞ...」と後ろを楽しみに待つ感覚で聞きます。  
逆に、if の部分にスピーカーの主張と逆の内容がきた場合、利点による説得ではなく、マイナス点による説得(if ...しないと、こういうマイナスがあるよ) になります。